２０１２／１２／０２　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：信仰の成長を目指して３　：　従順における成長２
聖書箇所：ピリピ人への手紙　２章１３－１６節

私たちは前回から「信仰の成長」のその中でも特に「従順における成長」をテーマにして学んでいます。パウロはピリピ教会の兄弟たちに命令を与えました。それは彼らが益々従順に歩み続けていくようにという命令でした。なぜなら、信仰者の一人一人が主に従って歩んでいくなら、みことばに従って生きていくなら、その人は主イエス・キリストに似た者に変えられ続けていくからです。そのことを私たちは前回も見ました。いったい、どのようにすれば私たちは従順に歩み続けることができるのか？その方法を見て来ました。私たち信仰者は主に対して従順に生きていくことが大切であることを知っています。ところが、実際にそれは大変難しいことも知っています。恐らく、多くのクリスチャンはそのように願ってそのように歩んで来たけれど、実際に、そのように生きたか?と問われると、そのように生きたこともあるけれどできなかったこともたくさんあると答えるでしょう。従順に従っていきたいという気持ちはあるけれど、それがどれほど難しいかをよく知っていると、そういう皆さんでこの場所は溢れているのではないかと思います。

今日、皆さんと見ていく聖書の箇所が私たちに教えてくれることは、確かに、主のみことばに従順に従い続けていくことは易しいことではありませんが、不可能なことではないということです。そのことを私たちは見ます。主のみこころに、主のみことばに従うことは可能なことだと、パウロはこのみことばを通して私たちに教えようとしているのです。なぜ、可能なのでしょう？それは神の助けがそこにあるからだと彼は教えてくれます。

（１）**従順への主の助け**：１３節**「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」**、あなたが従順に歩んでいくためには、神の助けが必要であり、そして、神の助けがあなたに備えられていると語ります。

（２）**従順への勧め**：１４節**「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」**と、再び、主に対して従順に歩み続けていきなさいと勧めます。

（３）**従順の祝福**：１５－１６節**「それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、:16 いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」**、あなたが従順に生きていくなら、そこにはすばらしい祝福があるということをパウロは教えます。

今日は１３節のみことばを見ていきます。

☆あなたの従順な生き方を助けてくださる神の働き

１．従順への主の働き（援助）　１３節

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」と、このように教えています。私訳ですが、この箇所は原語からこのように訳すことができます。「神があなたがたのうちに働いて、ご自分の喜びのために願いを持たせ、行なわせてくださるのです。」と。口語訳聖書では「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。」と、これが１３節のみことばが教えていることです。

まず、１３節の初めにある**「神は、」**の次に、実は、理由を説明する接続詞が付けられています。つまり、今まで話して来た内容は神に対して従順に生きていくということです。そして、その従順に従うということに関してパウロは、ここに従順に歩むことが可能な理由、あなたが従順に従っていくことがで

きる理由をここに挙げているのです。確かに、神に従順に従っていくことは難しいことです。パウロはここに「あなたは従順に従っていくことができる。その理由を挙げましょう。」と１３節を記すのです。ですから、今日、一つのことを覚えるとするなら「従順に歩むことは可能だ」です。言い方を変えるなら、「主のみこころは必ず実践できる」ということです。私たちはそのことをしっかり学ばなければいけません。それがこのみことばが私たちに教えることだからです。なぜ、あなたが従順に神のみこころに従っていくことができるのか、その理由はそこに神の助けがあるからとパウロは言います。

◎神の助け

１）「働き」について　：　「あなたがたのうちに働いて」

まず、見ていただきたいのは、この「働き」というギリシャ語のことばから英語のエネルギーということばが出ているということです。もう一つは、「働き」という動詞が現在形であるということです。継続して働きが続いているということです。だれがあなたがたのうちで働いているのか？だれがあなたがたのうちで働き続けているのか？みことばは明確に私たちに教えます。最初のことばを見てください。**「神は、」**とあります。原語でも最初に「神」ということばをもって来ています。なぜなら、パウロは「神」を強調したかったからです。パウロは「あなたがたのうちで働いておられる方は、私たちと同じ人間ではなくて全能なる神であって、その神が働きを続けておられる」と言います。それがパウロが最初に伝えようとしたメッセージです。

もし、私が皆さんに「あなたの信じている神はどういう方ですか？」と説明を求めたとすると、多分、皆さんは神のいろいろな属性を言われるでしょう。たとえば、神は永遠の方であるとか、神は遍在である、神は不変の方だと言われるかも知れません。必ず、出て来るのは「神は全知、全能である」でしょう。どのような神を信じているのか、その方についての説明ができたとしても、問題はその方をあなたはそのように受け入れているかどうかです。私たちは私たちの神は全能、つまり、どんなことでもできる神だと信じています。ところが、私たちの歩みを見たときに、私たちは「できません」ということが余りにもたくさんあるのです。私たちはこうして神のみことばを見て、これが神の命令だと聞いても「私には難し過ぎます。私たちはできません。もう少し若かったらできたのですが…、もう少し～だったら…」とそのように言うのです。確かに、私は神は全能だと信じているけれど、その全能の神にあって実はできないことがあるのですと、この矛盾に気付かれますか？神は全能だと言いながら、私たちの取っている行動は「神は全能ではない」と表わしているのです。もしかすると、これは私たちの問題かもしれません。頭で知っていることが私たちの生活に生かされていないのです。

パウロが私たちに言わんとしていることは「あなたのうちに全能の神がいるだけでなく、その方があなたのうちに働きを為しておられる」ということです。ピリピ１：６で言われたことと同じです。**「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」**。ということは、繰り返しますが、神があなたに「しなさい！」と言われた命令はあなたは実践できるということです。あなたのうちにおられる神はどんなことでもおできになる神だからです。不可能の何ひとつない方です。できないことが何ひとつない、それが神だからです。

２）「働き」の内容

神があなたがたのうちに働きを継続されていると言ったのですが、見ていただくと、この神の働きについて二つのことが挙げられています。つまり、神はあなたのうちでこのような働きを為しておられるということです。「志を立てさせ」と「事を行なわせてくださる」という二つの働きです。

（１）「志を立てさせ」

この動詞の意味は「願いを持たせてくださる、そのようにしようと思う、何かを決心する、決意する」です。つまり、神はあなたがたの心に働き、あなたがたの意志に働き、あなたが神のみこころを知ったときに、神のみことばを学んだときに、そこに示される神のみこころに対して「そうしていきたい、そ

のように歩んでいきたい」という決意に至らせるということです。神はすごい働きをあなたのうちに為しておられるのです。ですから、私たちがみことばを聞いて「そのように生きていきたい」とあなたが望むのは、あなたのうちにおられる神がその願いをあなたに与えているからです。これが神があなたのうちに為しておられる働きの一つなのです。もっと細かく見ていくと、神はどのようにあなたの意志に働くのか？ジョン・マッカーサー先生は二つのことを挙げています。

◎信者の意志を動かすための方法　＝　マッカーサー師

ａ．聖さの不満足

あなたが神に従っていこうと願ってそのように歩んでいくときに、自分の罪深さに神は気付かせてくださる。パウロは**「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」**と言いました（Ｉテモテ１：１５）。ローマ７：２４でも**「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」**と記しています。神はあなたがどれ程罪に染まった者かを明らかに示し続けてくださるのです。「私はあの人より優っています」とか「あの人より私は信仰的です」と言う信仰者がいるなら、それがその信仰者の誤りを明らかにしています。信仰が成長していくなら、私たちは自分がいかに神の前に罪深い者であるかを神によって示されるのです。それが示されたときに、私たちは余りにも自分が神の望まれる基準から外れているゆえに、その神の基準に少しでも近づきたいという願いをもちます。余りにも罪深いけれど、神が喜んでくださる者に少しでも変えられていきたいと。

ｂ．聖さへの渇望

私たちは余りもの罪深さに気付かされるとき、そして、容易に罪を犯してしまう現実を見たときに、罪に対する憎しみが増して来ます。「どうしてこんなに罪を犯すのだろう？このような罪から離れていきたい！」と。そのときに私たちは罪を憎んで神が愛される聖さを求めていきたい、より主に似た者に変えられていきたいという思いを神によって強められていくのです。ですから、神が私たちの心の意志に働かれるときに、私たちはより主が喜んでくださる者になっていきたいと強く願うのです。振り返ってみると、神はそのように私たちに働いておられます。救いに与っておられる皆さんの心の中に、何とか罪から離れていきたい、もっと主に喜ばれる者になっていきたいという思いを持たせてくださるのです。主ご自身がそのような働きをあなたのうちに為しておられるからです。パウロはピリピ３：１２－１４でこのように言っています。**「:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」。**

神は私たちに「神に喜ばれる者になっていきたい」という思いをくださるのです。そして、私たちの意志に神は働いてくださるのです。今以上に、聖い者に変えられていきたい、今以上に、主に似た者へと成長していきたいと。主が悲しまれたり、主を失望させる者になりたくない、却って、主に喜ばれる者として成長していきたいと、このような思いを持たせるという働きを主は始められて、そして、その働きは継続しているのです。

パウロはそのことをこの１３節の初めのところで言ったのです。だから、私たちがみことばを聞いてこれが神のみこころだと知ったときに、少なくとも、私たちの心の中に神が為してくださるわざは、「私は主を心から愛する者として成長していきたい、隣人を愛しなさいと聞いたから私は隣人を愛する者として成長していきたい、家庭にあって男性がしっかりした霊的リーダーシップを発揮しなさいと言われたから、私はそのような者として成長していきたい」という願いをもつようにされることです。家庭にあって妻が男性を励ましながら良き助け手として働いていくようにという命令を聞いたなら、「主よ、聖

書が教えてくださる忠実な妻になりたい、そのような者として成長していきたい」という願いをもつのです。この世にあって世の光として証を続けていきたい、主に似た者へと変えられていきたい、主に仕え続けていきたいと、みことばを聞くときに私たちはそのような神が示してくださるみこころに対して、「そのように生きていきたい」という思いをもつのは、それが神の働きだからです。

ここからが問題です。確かに、私たちはそのような願いをもつのですが、いつもその後には「できない！」という失望がやって来ます。一生懸命頑張ってみたけれどだめだった、神が喜んでくださる者になろうとしたけれど、結果的に元のもくあみ、同じことを繰り返している…。「私は信仰が弱いし、私はだめです。できる人はいるけれど私はだめです。」と。もし、そのように思っておられるならぜひ次のみことばを見てください。

（２）事を行なわせてくださる

あなたのうちに働いておられる神の働きは**「志を立てさせる」**ことと、もう一つは**「事を行なわせてくださる」**ことです。この動詞も先ほどのように英語の「エネルギー」のことばのもとになっていることばです。しかも、ある神学者は「この『事を行なわせてくださる』ということば、エネルギーということばは『エネルギーがフル稼働している状態』を指す。」と言います。目標に到達するために十分なエネルギーがそこでフル稼働していると。このことばはただエネルギーが与えられているというだけでなく、あなたが目標に到達することができるために十分な力が、もうすでにあなたのうちで活動しているということです。そのような意味をもったことばです。だから、私たちが気付かなければいけないことは、神はあなたのうちにその力を与え、神が望んでおられることをあなたが実践するためにすべての必要な力を備えてくださり、その力はいつでも働き出すような状態にあるということです。

先ほど、私たちは「エネルギー」ということばを見たとき、それは**「あなたがたのうちに働いて」**とありました。そこでは、全能の神があなたがたのうちに働き続けておられるということを見ました。ここでは、その全能の神が**「事を行なわせてくださる」**と言うのです。神はあなたのうちに願いをくださるだけでなく、それを実践するために必要なすべてのものを備えてくださっているのです。ものすごいことをパウロはここで私たちに教えてくれているのです。まさに、私たち信仰者がどのようにして生きていくのか、そのカギを教えているのです。

あなたのうちに与えられたその願い、それを神ご自身が実践させてくださる、みことばの実践は可能だと、神ご自身があなたに約束されたのです。だから、従順であれと命じられた主は、あなたが従順に歩むための必要な十分な助けを与えてくださいます。主が助けを与える、力を与え続けるという、それこそがこのみことばが私たちに与えてくれる約束です。ですから、先ほども見たように、みことばを聞いて「私は主を心から愛する者として成長したい」との願いをもって一生懸命自分の力でやって来たけれど、その結果は敗北だった。けれども、みことばを見るときに、神の助けをもらうなら、私たちは神を愛する者として成長していくことが可能だというのです。自分の力で隣人を愛そうと努力したけれどできなかった。でも、みことばは神の助けをもらうなら隣人を心から愛する者として成長していくことができると教えます。家庭において霊的リーダーとして成長することは可能です。家庭において、聖書が教える忠実な妻になって成長していくことは可能なのです。この世にあって世の光として証をし続けることは可能なのです。主に似た者へと変えられていくことは可能なのです。主に仕え続けることは可能なのです。そのすべてのことが実現できるためのすべての力はもうあなたのうちに与えられているのです。

これがクリスチャンです。これが私たち救われた者たちです。ですから、私たちが神の命令を聞くときにそれは重荷にならないということ、逆に、期待が出て来るということは、神があなたをそのような人に変えていってくれるからです。でも、その神が与えてくれる力を覚えていない人は、一生懸命自分の力でやらなければいけないとなって、それはあなたにとって重荷である律法なのです。神が喜んでく

ださるために自分の力でこのようなことをやっていかなければいけないと、その結果は、いつも敗北です。そうすると、自分自身にどんどん罪悪感をしょい込んでいくのです。「私は劣ったクリスチャンだ、私は本当に弱いクリスチャンだ、情けないクリスチャンだ…」と。そのような結論に到達するのは当然です。大切なところを見落としているのです。神の命令は神の力によって為さなければいけないのです。なぜかはこれから説明していきます。

信仰者の皆さん、神はあなたの弱さを知っておられます。あなたがどれほど弱いか、これまでにどれだけ失敗をして来たか、神はすべてのことをご存じです。だから、あなたに何が必要かを知っておられる神が、その必要なものを備えてくれたのです。あなたがみことばを実践するために何が必要かを知っておられる神は、だから、神の力をあなたに与えてくれたのです。覚えておられますか？エルサレムのベテスダという池での話です。イエスはエルサレムにおられ、大勢の病人や盲人、足のなえた人たちがそのベテスダの池に集まって来ていました。「主の使いがときどきこの池に降りて来て水を動かすとき、最初にその池に入った人の病が癒される」と言われていました。だから、みなその機会を待っていたのです。主イエス・キリストは３８年もの間、病に苦しんでいる一人の人を見かけて「よくなりたいか？」と言われました。彼は「もちろんだ、ただ、その主の使いが水をかき回したときに、私はからだが不自由だから真っ先に池に入ることができない。」と言います。イエスは彼にこのように言われます。「起きて床を取り上げて歩きなさい。」と。良く考えてみると非常に不思議な命令だと思いませんか？彼にはそれができないのです。次のみことばは**「すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。」**です。ヨハネの福音書５：１－９に記されています。つまり、この話が私たちに教えることは「私たちには不可能でも神には可能だ」ということです。この人は自分の力で一生懸命何とかこの癒しに与ろうとしたのです。叶いませんでした。しかし、主の助けを受けたときに彼は癒しを得たのです。

ですから、私たちの力では主の命令に従うことはできません。でも、神の助けをいただいたときにそれは可能なのです。私たちに与えられているその力に頼り続けていくことが大切なのです。コロサイ１：２９に**「このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」**とある通りです。パウロも自分のうちに備えられている神の力を信じて、その力に頼って、信頼をおいて信仰者としての歩みをしていたことを告白しているのです。

さて、今見て来たように、神のことばは明確に、私たち信仰者がどのように生きていくべきなのかを教えています。これまで一生懸命主のみこころに従おうとしても失敗を重ねて来られた皆さん、もしかすると、その歩みを振り返って「だから、私には無理だ。できない！」と思っておられるかもしれません。これまでの失敗に失望しておられるかもしれません。私たちの信仰生活はやり直しがきくのです。リセットができるのです。今日から、このみことばが教えているように生きていくことができるのです。神の力をいただきながら神のみこころに従っていくことが可能なのです。問題は、あなたがそのように歩んでいくかどうかです。このようなすばらしい約束をパウロは私たちに教えてくれました。「神があなたのうちに働き、志を立てさせ、事を行なわせてくださる」。

３）働きの目的

もう一つ見たいことは、神はなぜこのような働きをされるのか、「働きの目的」です。ここに**「みこころのままに」**とあります。このことばは新約聖書に９回出て来ます。そのほとんどの箇所では「善意、みこころ、みこころに適う、望み、み旨」と訳されています。同時に、「気に入ること、満足、悦び」という意味もあります。ここでパウロが言っていることは「神ご自身の喜び、神ご自身の満足」のことです。最初に皆さんにご紹介した口語訳聖書のみことばであり、また、私訳ですが、「ご自分の喜びのために」ということです。それが目的なのです。神はこのような働きを為さる、そして、あなたが神のみこころに従順に従っていくなら、そのことを神はお喜びになるということです。あなたが神の力をいただきながらに神のみこころに従順に従っていくときに、神はそのことをお喜びになるのです。神はその歩みを

見て満足なさるというのです。救われる前の私たちを見てください。エペソ２章に書かれています。私たちは自分の努力で救いに与ろうとしました。そのために一生懸命良いことをしようとしました。でも、私たちが考えるどんな良いこともどんな善行も神はお喜びにならなかったし満足なさらなかった。だから、私たちの善行によって神の救い、罪の赦しを得ることはないのです。どれ程頑張っても、神が要求しておられる完全な聖い行ないを私たちは行なうことはできないのです。ですから、私たちは自分で自分を満足させることはできるかもしれませんが、私たちの考える良い行ないは神を満足させることはできないのです。ところが、このエペソ２：８－１０を見るとこのように書かれています。**「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。:10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」**と、つまり、あなたが救われることによって、あなたは良いことを行なう者に変えられたと言うのです。かつての私たちが考える良い行ないでは神が喜ばれることはなかった、神は満足されることはなかったのです。でも、救われることによって神が備えてくださった良いことを、神の助けをいただきながらするときに、その良い行ないを神はお喜びになるということです。ジェームス・ボイスはこの箇所について「これはピリピ３：１２－１３についてのパウロの注解である。」と言っています。

◎二つの行ない

・自分自身から出た行ない：

・良い行ないをするために：

自分の考える良いことを自分の力でするなら神は喜ばれない。しかし、神が望まれる良いことを神の助けをいただきながら為すときに、神はそれを見て満足され喜ばれるというのです。ですから、すべてのカギは、私たちは神のみこころに従うべきで、その実践のために必要な力を神からいただきながら歩んでいくなら、その行ないを神は喜ばれるということです。それがこの１３節でパウロが教えていることです。私たちが学んで来ているように、主が喜ばれる働きは主のみこころに沿ったものでなければならないのです。私たちが勝手に判断して「これは神が喜ばれるでしょう」ということは、果たして、それは神のみこころに沿ったものかどうかを考えなければなりません。もし、そうなら、そのことを神の力によって為すとき神は喜ばれるということです。私たち信仰者に必要なことは神のみことばをしっかり学ぶことです。そうするなら、聖霊なる神はあなたのうちに「そのように生きていきたい、このみこころに沿って生きていきたい」という願いをくれます。そして、その願いをもって備えられた神の力によって歩んでいこうとするときに、それが現実のものになっていくのです。そして、その歩みを神は喜ばれるのです。ということは、みこころに従っていくことは不可能なことでしょうか？可能です。神はあなたがそのように歩んでいくことを望んでおられ、あなたがそのように歩むときに神は喜ばれるのです。今から、三人の勇者を紹介して終わります。

◎三人の勇者

（１）モーセ

彼はご存じのように、主からイスラエル人をエジプトから解放するというとてつもない務めをいただきました。余りにも大きな責任重大な務めです。彼はそれを聞いて「分かりました。やります。」とは言えませんでした。言い訳をしてこのように答えています。出エジプト４：１０**「モーセは【主】に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」**と。つまり、「それは無理です。たとえ、あなたが言われても無理です。できません。」と言ったのです。すると、神はこのように言われました。１１－１２節**「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするの**

か。それはこのわたし、【主】ではないか。:12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」と。モーセはどのようなレッスンを学ぶ必要があったのでしょう？神の言われたことに彼の肉は「不可能です」と反応しました。彼が学ばなければいけなかったことは、自分には不可能と思えても、神が「やりなさい」と言われたことは神の力によってできるということです。そして、ご存じのように、モーセはイスラエルの民を率いてエジプトを出たのです。

（２）ヨシュア

もう一人は、モーセの後継者ヨシュアです。モーセが亡くなった後、彼は神からこのような約束を受けています。ヨシュア記１：５－９**「あなたの一生の間、だれひとりとしてあなたの前に立ちはだかる者はいない。わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。:6 強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならないからだ。:7 ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。これを離れて右にも左にもそれてはならない。それは、あなたが行く所ではどこででも、あなたが栄えるためである。:8 この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行うためである。そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。:9 わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、【主】が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」**。これがヨシュアに対して神が言われたことです。この学びを受けたヨシュアはこの後神からレッスンを受けていきます。確かに、そのことを彼はよく知っていたはずです。ところが、大変難しいテストが続きます。一つ目は、イスラエルの民を率いてヨルダン川を渡るということです。神は言われました。このヨルダン川の乾いたところをあなたがたは渡っていくと。確かに、ヨシュアはモーセといっしょに紅海を渡って来ました。そのような奇蹟を見ていました。今、ここで彼はリーダーとなって神が言われたように約束の地に向かって行こうとするとき、神は「ヨルダン川の岸に立つならその水はせき止められ地は乾いてあなたがたはそこを渡ることができる」と言われたのです。そんなことが有り得るだろうか？確かに、モーセのときは起こったけれど…と。ヨシュアは「神が言われたことは必ず神が成就される」ということを学ばなければならなかったのです。ご存じのように、その後彼らはヨルダン川の乾いたところを渡っていきました。テストを一つパスしたのです。

次のテストがやって来ます。今度はエリコの征服です。難攻不落の城壁を越えることです。神はヨシュアのためにすばらしい方法を授けられました。グループをこのように分けてこのように戦えばこれを滅ぼすことができると、残念ながら、神はそのような作戦をお与えにはならなかった。神が言われたことは「六日間、一日一回その城壁の周りを回りなさい。七日目には七回ぐるっと回って祭司たちは角笛を吹きなさい。」でした。どうしてそのようなことで城壁が崩れるのか？人間的には不可能なことです。兵士たちはそんなことを聞くと嘲笑ったかもしれません。ところが、ご存じのように、城壁は崩れました。ヨシュアたちが学ばなければならなかったことは「神は全能のお方だ」ということです。しかも、神が使われる方法は人間的に見ると絶対に不可能だと思われることです。なぜなら、そうでなければ私たちはこの全能の神の全能さを学ぶことがないからです。この方はどんなことでもお出来になると私たちは口で言いながら、私たちは不可能だと言い続けているのです。最初にも言ったように、そのような信仰はおかしいと思いませんか？私たちの信仰は「私が何を信じているか？」ではなく「信じている方がどのようなお方であるか？」です。私たちの信仰は不完全です。しかし、信仰の対象である神は完全なお方です。少なくとも、私たちはその方に敬意を払って信じて、その方のみわざが為されることを願って生きるべきではありませんか？ヨシュアも大切なことを学びました。確かに、私たちとともにおられる神は全能のお方だと。

（４） ギデオン

士師記６，７章に書かれています。彼は６：１３，１７，３６を見ると、非常に疑い深い人物だったことが分かります。「もし、」ということばを繰り返しています。神が言われたことに対してやはり疑いを抱いてしまうのです。６：３６からの記事を見ると、主がともにおられることの証拠を求めた人です。そして、神の命令はミデアン軍に戦いを挑み彼らを滅ぼせというものでした。ミデアン軍は１３万５千人の大軍隊です。ギデオンは兵士を集めますが、集まったのは３万２千人です。四分の一です。これでどのようにして戦えるのか？ご存じのように、神は「多すぎる」と言われました。３万２千人から１万人に、そして、３００人へと減らされていきます。なぜ、神はそのようなことを為さったのか？もしかすると、３万２千人で上手な作戦を立てるなら彼らに勝利できるかもしれないと、そのように思ってしまうからです。みことばはこのように言っています。**「あなたといっしょにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った』と言って、わたしに向かって誇るといけないから。」**と。神は私たち人間の弱さをよくご存じです。そこで恐れおののく者はみな帰しなさいと言われ、そうすると、２万２千人が帰っていったのです。残った１万人はまだ多いと、神は水辺でどのようにして水を飲むかによって二つのグループに分けよと言われます。ひざを付いて飲むか、手で水をすくって飲むかと、どちらがいいということではなく二つに分けて一つを選んだのです。それが３００人でした。そして、ご存じのように３００人が１３万５千人のミデアン軍に勝利するのです。

もっと正確に言うなら、３００人も必要なかったのです。神は滅ぼそうとされるなら一瞬のうちに滅ぼすことができます。すべてこの勇者たちのためのレッスンです。ギデオンは「私の神は全能だ」ということを学ばなければならなかったのです。私の方法ではなく、神の方法で為さなければ神はお喜びにならないということです。

兄弟姉妹の皆さん、このレッスンを今私たちも学ばなければいけないのです。私たちの神は全能だと、私たちは頭では分かっています。それなら、神が言われたことに対して「できません」という不信仰な態度から「神さま、私はあなたが教えてくださったから、あなたの力によってできると分かりました。そのように生きていきたいからその力をください。」と願うのです。神はそのような信仰者を神はお喜びになるし用いて来られたのです。あなたはそういう信仰者ですか？別の言い方をするなら、あなたはそのような信仰者として今日から生きていきたいと思いませんか？全能なる神を心から崇める生き方です。神の言われたことは必ずそうなると信じ切った、まさに、主が喜ばれる信仰者の生き方です。そのような人に神は変えていってくださるのです。私たちが信仰者として主に従い続けていくときに、このような不信仰を捨てていかなければいけません。神は私たちの心に働き、意志に働き、神のみこころを行なっていくという思いをくださり、そして、それを実現させてくださるのです。すばらしい神です。その神が私たちを導き続けてくださる。それは私たちを救ってくださった主が喜んでくださるためです。

主のみこころは必ず実践できるのです。繰り返します。主のみこころは必ず実践できます。信仰者の皆さん、その確信をもって生きてください。主に従い続けることは可能なのです。もちろん、そこには失敗もつきものです。ですから、罪を告白しながら生きていくのです。でも、主に従い続けていくことは可能だと、それが信仰者です。それが主によって救われた者たちに与えられたすばらしい主の祝福であり主の約束です。そのように生きてください。私たちの神を喜ばせるために…。

《考えましょう》

１．どうして私たちは「それは私にはできない」と結論付けてしまうのでしょう？
２．主はどのような信仰の歩みを、我々信仰者に望んでおられると思いますか？
３．従順に主に従うことがどうして大切なのでしょう？
４．あなたはどうすれば従順において成長できると思いますか？